

# SNS 利用態度と友人観の因果関係 —SNS サービスの特徴の相違に着目した検討—<sup>1</sup>

申 知元 (青山学院大学大学院)  
潮村 公弘 (フェリス学院大学)

## Causal relationships between attitudes for SNS use and views of friends: An examination focusing on differences in the characteristics of SNS

Jiwon SHIN (Aoyama Gakuin University)  
Kimihiro SHIOMURA (Ferris University)

〔概要〕本研究では、「SNS 利用態度」と「友人観」の因果関係について探究するために、同一対象者に同一の質問紙を用いて、複数回の調査を行うパネル調査を実施した。分析においては、因果関係を探究する上で推奨されている「交差遅れ効果モデル」と「同時効果モデル」を用いた。「SNS 利用態度」に関わる要因は多様であり、その中には性別も含まれることが考えられる。また「友人観」にも性差が想定されることから、友人関係に強いこだわりを有していると考えられる女子大学生のみを対象にした。このことによって、女子大学生における SNS 利用と友人関係の因果関係を明らかにすることができるだろう。

分析の結果、使用する SNS の特性によって異なる友人観が関係を有することが明らかになった。LINE は、特定の相手とのやり取りが前提であり、実際の付き合いも伴われることが多い。交差遅れ効果モデルでは、LINE に対する束縛感と友人から傷つけられることを回避する行動が双方向の因果関係を有していた。また、同時効果モデルでは LINE に束縛を感じる人は友人に対する自己開示が低下していた。このような結果は、LINE におけるコミュニケーションが日常生活の延長であり、円満な人間関係を構築・維持するためには回避できないことを示唆する。一方で、Twitter は不特定多数との関係性が想定され、ネット上の付き合いに留まることが多い。交差遅れ効果モデルと同時効果モデルの結果を総合すると、Twitter が便利だと思う利用者は、気さくな人間関係を求め、Twitter 使用において束縛を感じないことが示された。

---

<sup>1</sup> 本研究の一部は、潮村・申 (2018) SNS 利用と友人観の因果関係の探索 日本心理学会第 82 回大会 発表抄録集 P. 156 として発表された。

## 1. はじめに

近年、若者の友人関係が希薄化していると言われている。赤坂・坂元（2008）は、友人関係の希薄化を友人と深く関わることを避け、互いに傷つかないように深入りせず、浅い友人関係を築こうとすることであると定義した。さらに、ゆとり世代とも言われる若者の友人関係の特徴として、常に相手に気を遣う「優しい関係」が重要な要因であるという主張もある（土井，2008）。土井（2008）の「優しい関係」とは、相手と一定の距離を維持し、互いに傷つかないことが重要な関係のことである。これらの先行研究から若者の友人関係の特徴として、自分が傷つくことを回避する浅い人間関係を好むことが挙げられる。

心理学においては、若者の友人関係の特徴とその変化がケイタイやパソコンを介したコミュニケーションで顕著化されるとし、両者を関連づける様々な研究が行われてきた。ケイタイの利用実態と友人関係の関連性を検討する研究（足立・高田・雄山・松本，2003；石川，2008；岡本・江川，2003；尾上，2007）、またはインターネット上のコミュニティの利用実態と友人関係の関連性を検討する研究（江下，2007；春日・三枝・古井・速水，2007；大向，2006）がその例である。本研究では、ケイタイとパソコンを介したコミュニケーションとしてSNS利用を取り上げ、若者のSNS利用態度と友人関係の因果関係を探求する。

### 1.1. ケイタイの普及

今日、ケイタイは必要不可欠な生活の一部になっている。1989年には0.3%に過ぎなかった日本のケイタイの普及率は、2017年には109.4%に至っている（総務省 a，2019年9月1日閲覧）。通話をするために開発されたケイタイは、メール、インターネット、テレビなど様々な機能を付着したスマートフォンに進化し、我々の生活様式に影響を与えている。

ケイタイの発展によって、際立つ変化の一つが他者との「つながり」方である。ケイタイの普及につれ、情報伝達をするためのコミュニケーションを含め、関係を構築・維持するために行われる友人とのコミュニケーションに変化が起きているからである（石川，2008；中村，2003；岡本・江川，2003；尾上，2007；辻，2006）。

ケイタイの特徴として、人間関係を築く際に障害物となっていた物理的な空間の制約から解放されたことが挙げられる。ケイタイが普及する前は、電話が置かれている特定の場所でのみ通話が可能であり、遠方の人とつながるためには公衆電話や固定電話が置かれている場所への移動が必要であった。しかし、ケイタイが普及することによって、どこでも人とつながることができるようになった。

また、ケイタイの普及によって時間の制約からも自由になっている。ケイタイは特定の個人とつながることができ、24時間いつでも他者と連絡することが可能である。早朝や夜には連絡しないことが社会的なマナーとされているものの、緊急時や互いが許容するのであればいつでも連絡し合うことができる。

物理的な制約と時間的な制約を弱体化させた機能として「メール」機能を外すことはできない（足立ら，2003；兎本・日下部，2011；田山，2011）。ケイタイが普及するまで電話は、相手と「話す」ことが重要な役割であり、コミュニケーションの参加者が同じ時間につながっていることが求められた。ケイタイの「メール」機能により、「文字」による連絡ができ、発信者と受信者が各自の都合に合わせて連絡し合うことが可能になった。

### 1.2. インターネットの普及

人々の行動様式に影響を与えたもう一つの通信技術がインターネットの普及である。1990年代後半からパーソナルパソコンでもインターネットに接続できるようになり、若者を中心としたソーシャル・ネットワーキングサービス（Social Networking Service：以下、SNSとする）の利用が急増した。SNSとは、インターネット上で社会的なネットワークを構築するサービスであり、Twitter、Facebook、Instagramなどが代表的である（武市，2014）。利用者はSNSに、日常の出来事に関する書き込み、写真の公開、政治や社会に関する意見の発信などをする。実名を使うことも、偽名を使うこ

とも可能で、一人が複数の SNS を利用することも多い。SNS の利用は、インターネットが普及することによって新たに現れた他者とのコミュニケーション形式の一つである。

ところが、先行研究によると日本の若者は、SNS を通じて新しい人との交流を求めず、既存の関係の維持・強化を目的とするという（小寺，2009；大沼・木村・佐々木・武川，2012）。日本の若者は、友人の SNS を確認して適切な反応を示し、また自分の行動を友人に知らせるために SNS を利用しているとも言える。SNS を利用して、友人の情報を収集するために気を遣ったり、時間を消費したりすることは、時間と努力を必要とする（松尾・安田，2007）。人間関係を維持するための努力が必要であることは、SNS の利用が負担になりかねないことを意味する。こうしたことから、SNS の特徴が友人との関係や SNS の利用行動に影響を与えることが推察できる。

こうしたことから、SNS の利用が必ずしも人間関係を良好にすることはなく、誤解による葛藤を引き起こすとの指摘もある。大沼ら（2012）によると、SNS でのコミュニケーションは文字のみで行われるため、否定的な発言に敏感に反応する可能性がある。対面状況のコミュニケーションにおいてはジェスチャーや声など非言語により気にならない言動が、文字のみのコミュニケーションになると深読みしたり、間違えて解釈したりし、関係を悪化させることもあり得る。したがって、SNS の利用は文字によるコミュニケーションと人間関係、特に若者の友人関係に影響を与えることが予想できる。

### 1.3. 本研究の目的

ケイタイとインターネットの普及は、我々の生活パターン、コミュニケーション行動を劇的に変え、人間関係の形成、構築、維持に影響を与えている。特に、ケイタイとパソコンの機能を 1 台の端末で実行できるスマートフォンの所有・利用が拡大している。2010 年に 9.7% であったスマートフォンの普及率は、2017 年には 75.1% に至り、パソコンによるインターネットの使用を超えている（総務省 b，2019 年 9 月 1 日閲覧）。

スマートフォンを利用することによって、情報通信機器を介したコミュニケーションが促進され、結果的に人間関係にも影響を与えている可能性が高い。特に、別のコミュニケーション手段であった、ケイタイの「メール」と SNS の機能が統合され、これまでとは異なる利用態度および行動が示されていることが予想できる。具体的には、ケイタイの「メール」機能は LINE や Skype、Kakao Talk などのメッセージングが受け継ぎ、パソコンで接続していた Twitter、Facebook などの SNS の利用がさらに容易になっている。スマートフォンの登場により、別々に研究されてきたケイタイによるコミュニケーションとインターネットによるコミュニケーションに関する議論を統合することができるようになったと言える。

本研究の目的は、日本人女子大学生の SNS の利用態度と友人観（友人に対する態度）の関係性をパネルデータによって明らかにすることである。具体的には、スマートフォンが普及することによって日本で広く使われている LINE と Twitter の利用態度と友人観の因果関係について探索する。

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期と対象

2014 年 6 月・7 月（1 次調査）と同年 11 月・12 月（2 次調査）に横浜市内の女子大学で同一の質問紙を用いて調査を実施した。授業担当者に調査を 2 回実施することを伝え、質問紙の配布及び回収を依頼した。1 次調査に 140 名、2 次調査に 165 名が参加し、2 回の調査両方に参加した 84 名のデータをパネルデータとして分析に用いた。1 年生が 78 名、2 年生が 6 名で、平均年齢は 1 次調査が 18.4 歳（SD = .56）、2 次調査が 18.9 歳（SD = .57）である。

## 2.2. 使用尺度

尺度項目はすべてを用いることで回答者の負担が大きくなるため、(a) 研究目的との関連性、(b) 因子負荷量、(c) 質問項目の分かり易さ、を参考に尺度の一部を選別した。

- (1) 藤・吉田 (2009) によって作成された、ネット利用と現実とのバランスに関する行動を尋ねる項目は「没入的関与」(4項目)、「依存的関与」(4項目)、「非日常的関与」(3項目)で構成されている。「没入的関与」の2項目と「依存的関与」の4項目を質問紙に取り入れた。尺度の「ネット」を「LINE」と「Twitter」に入れ替え、SNS利用が現実にもどのように関わっていると思うかについて尋ねた。
- (2) 五十嵐・吉田 (2003) のケイタイメールの使用認知尺度を用いた。「親和充足」(9項目)、「利便性」(4項目)、「束縛感・不快感」(3項目)で構成されている。「利便性」の3項目と「束縛感・不快感」の3項目を使用した。「ケイタイ」の代わりに「LINE」と「Twitter」を質問に適用し、これらのSNSの利用に対する感情の測定を試みた。
- (3) 友人関係は、岡田 (1999) の友人関係尺度を用いた。「自己閉鎖」(10項目)、「軽躁的關係」(6項目)、「侵入回避」(8項目)、「傷つけられ回避」(5項目)の4因子から、因子負荷量の高い4項目ずつを使用した。

## 2.3. 因果関係の推定<sup>2</sup>

因果関係を説明するためには、(a) 共変動関係であること、(b) 原因が結果に時間的に先行していること、(c) 第3の変数が関与しないこと、が前提となる(磯, 2011)。1時点のみを測定する質問紙調査においては、相関分析による共変動関係のみ確認されることが多い。質問紙調査が行われる時点では、原因と結果の時間的順序が不明瞭であり、無数に存在するすべての第3の変数を質問紙に取り入れることは不可能であるからである。

このような問題を解決するために考案された分析手法がパネル調査である。パネル調査は、同一参加者に同一内容の質問紙を一定の期間をおき、複数回実施する調査法である(高比良・安藤・坂元, 2006)。パネル調査を実施することにより、変数間の共変量関係と時間的順序を明らかにすることができ、より精緻な因果関係を追求することが可能になる。

パネル調査の分析には、交差遅れ効果モデルと同時効果モデルといった共分散構造分析の手法が用いられる(Finkel, 1995; 高比良ら, 2006)。これらの分析手法は、原因と結果が不明瞭な変数が存在する際に、双方向的な因果関係が検討できることが利点であり、心理学、社会学などの研究で広く利用されている。

交差遅れ効果モデル(cross-lagged effect model, 図1)は、1次調査から2次調査への影響を推定するモデルである(中澤・三輪, 2012)。XとYといった二つの変数が存在する際に、1次調査のX1が2次調査のY2に影響をあたえるのか( $\beta_1$ )、もしくは1次調査のY1が2次調査のX2に影響を与えるのか( $\beta_2$ )、さらには双方向の因果関係があるのか( $\beta_1$ ,  $\beta_2$ )といった時間を伴う変数間の関係性を確認する分析手法である。

同時効果モデル(Synchronous effect model, 図2)は、変数間で共時的に生じていると予想される因果関係を検討する分析法である(戸ヶ里, 2009)。1次調査の結果は道具的な存在として使われ、2次調査においてX2とY2が因果関係を有するかを確認する(高比良ら, 2006)。交差遅れ効果モデルが時間の経過によって生じる因果関係を推定することに対して、同時効果モデルは1次調査の反応を含めた上で、2次調査における因果関係を推定することに差異があり、両者の結果が常に一致することはない。Finkel (1995) は、交差遅れ効果モデルと同時効果モデルの双方の検討を推薦している。

本研究では、高比良ら(2006)、小塩(2007)に従い、分析を行う。2次調査における変数間の誤差分散を0とする統制モデル(モデル1)と統制をおかない非統制モデル(モデル2)を設定し、 $\chi^2$ 値の差に基づいてモデルを決める。両モデルの $\chi^2$ 値の差が有意であった場合はモデル2を、有意でなかった場合はモデル1を採択する。

モデル間に差がなく、モデル1が採択されたとしても適合度指標が基準に至らない場合には、モデル2を選択する。

<sup>2</sup> 本論文の分析は、SPSS 26、およびAMOS 26を用いて行われた。



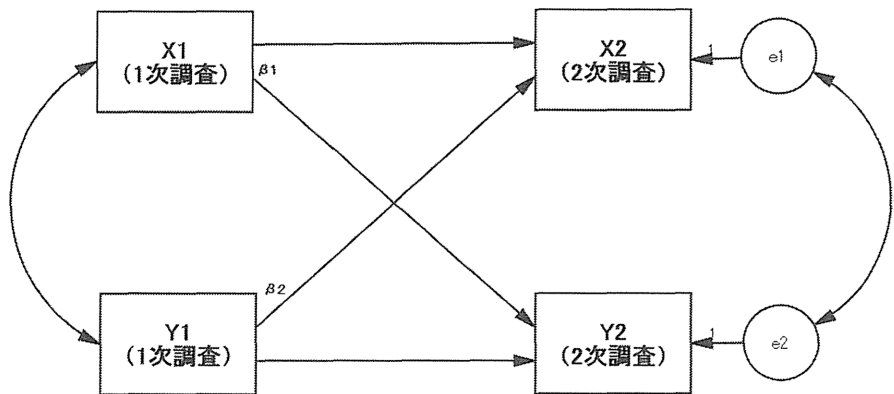


図1 交差遅れ効果モデル

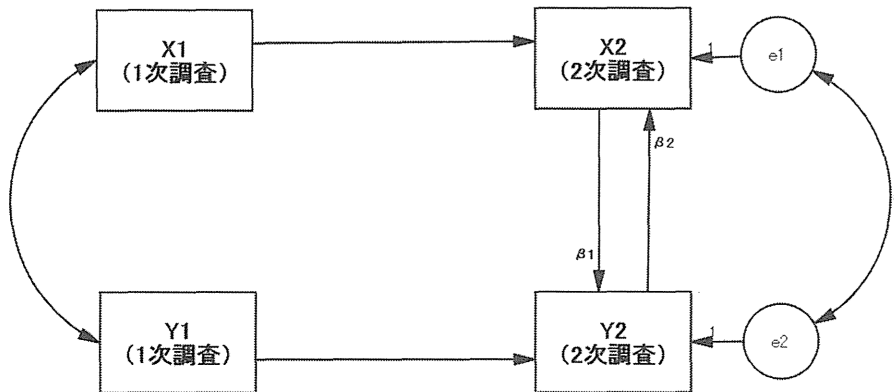


図2 同時効果モデル

Kline (2004) によると、モデルの良さを評価する CFI (Comparative Fix Index) は .95 以上が望ましく、.90 以上であることがモデル採択の基準となる。逆にモデルの悪さを評価する RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) は、.05 以下が望ましく、.05 から .10 の間はグレーゾーンとされている (Kline, 2004)。

### 3. 結果

#### 3.1. 項目分析

本研究では既存の尺度の一部を用いたため、各尺度別に探索的因子分析 (主因子法, パリマックス回転) を行い、尺度の妥当性を検証した。1 次調査のデータによる探索的因子分析を行い、因子負荷量が .40 以上、他因子への負荷量が .35 以下の項目を採択することにし、基準を満たさない項目を分析から外すことにした。その後、残った項目を用いて 2 次調査のデータによる因子分析を実施し、分析に用いる項目を確定した。

まず、SNS の利用に関する項目の探索的因子分析を行った。藤・吉田 (2009) を修正した SNS 利用と現実とのバランス尺度は、2 因子の 6 項目を用いたが、1 因子構造を有していることが LINE と Twitter の双方で確認された。因子負荷量が .40 に至らなかった「他にしなければならぬことがあっても、つつい Twitter/LINE を見てしまうことがある」を削除して対応し、「LINE 依存」と「Twitter 依存」と命名した。それぞれの 5 項目の平均値を算出し、分析に用いる

ことにした。

表1は1次調査における探索的因子分析の結果である。

表1 「SNS 依存」の1次調査データの探索的因子分析結果

	Twitter	LINE
Twitter/LINEができなくなったら、きっと耐えられないと思う	.914	.706
可能ならばずっとTwitter/LINEをしたい	.826	.728
Twitter/LINEにのめり込むことで、日常生活を忘れてしまえる	.804	.741
Twitter/LINEができない状態が続けば、イライラしてくるだろうと思う	.764	.738
Twitter/LINEの世界のほうが、生きているという実感が感じられる	.703	.685
他にしなくてはならないことがあっても、ついついTwitter/LINEを見てしまうことがある	.384	.507

Cronbachの $\alpha$ 係数と基礎統計量を確認した。1次調査においては、「LINE依存」( $\alpha=.826$ ,  $M=2.05$ ,  $SD=0.84$ )と「Twitter依存」( $\alpha=.898$ ,  $M=2.02$ ,  $SD=0.81$ )が十分な内的整合性を示した。2次調査においても、「LINE依存」( $\alpha=.787$ ,  $M=2.14$ ,  $SD=0.78$ )と「Twitter依存」( $\alpha=.919$ ,  $M=2.11$ ,  $SD=0.88$ )が十分な信頼性係数を示した。

続いて、五十嵐・吉田(2003)のSNS利用の使用認知に関する質問の因子分析を行った。分析の結果、2因子構造であることが明らかになった。Twitterの束縛感に含まれていた「公共の場で、他人がTwitterを利用しているのを見ると、不愉快である」は低い因子負荷量を示したため、分析から除外した。五十嵐・吉田(2003)を参考に、利便性は3項目、束縛感は2項目であることを確認した。「LINE利便性」「LINE束縛感」と「Twitter利便性」「Twitter束縛感」と名づけ、それぞれの平均値を分析に用いる。

表2はSNSの使用認知の探索的因子分析の結果である。第1因子は利便性、第2因子は束縛感である。

表2 「SNSの使用認知」の1次調査データの探索的因子分析結果

	Twitter		LINE	
	I	II	I	II
Twitter/LINE上では、面と向かって話しにくい相手ともやり取りしやすい	.801	.088	.984	.041
Twitter/LINE上では、自分の表情や声が相手に伝わらないので、気楽にやりとりができる	.719	.103	.538	.239
大したことのない用事でも、Twitter/LINE上であれば気軽にやりとりができる	.647	.220	.515	-.009
Twitter/LINEによって、自分の行動が常に他人に見張られている気がする	.068	.889	.217	.623
Twitter/LINEを利用していると、常に他人に縛られている感じがする	.162	.691	.073	.847
公共の場で、他人がTwitter/LINEを利用しているのを見ると、不愉快である	.153	.164	-.022	.506

尺度の信頼性を確認するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。「LINE利便性」(1次調査 $\alpha=.707$ ,  $M=3.27$ ,  $SD=0.86$ ; 2次調査 $\alpha=.773$ ,  $M=3.29$ ,  $SD=0.81$ )と「LINEの束縛感」(1次調査 $\alpha=.715$ ,  $M=1.79$ ,  $SD=0.79$ ; 2次調査 $\alpha=.736$ ,  $M=1.91$ ,  $SD=0.78$ )の $\alpha$ 係数が.70を超え、高い一貫性が確認された。「Twitterの利便性」(1次調査 $\alpha=.776$ ,  $M=2.64$ ,  $SD=0.98$ ; 2次調査 $\alpha=.800$ ,  $M=2.64$ ,  $SD=1.01$ )と「Twitterの束縛感」(1次調査 $\alpha=.754$ ,  $M=1.91$ ,  $SD=0.74$ ; 2次調査 $\alpha=.888$ ,  $M=1.97$ ,  $SD=0.83$ )の $\alpha$ 係数も.70を超え、分析に十分な信頼性を有することが検証された。

最後に友人関係尺度の探索的因子分析を実行した。その結果、友人関係尺度は4因子構造であった。1次調査と2次調査で異なる下位因子に属した「本当の気持ちは話さない」、.40未満の因子負荷量を示した「相手に自分の意見を押し

つけないう気をつける」「友達の前ではしゃぐ」「友達からつまらない人と思われないう気をつける」の4項目を分析から除外した。

その結果、友人関係尺度は次の通りである。第1因子は「自己開示」<sup>3</sup> (3項目)、第2因子は「軽躁的關係」(3項目)、第3因子は「侵入回避」(3項目)、第4因子は「傷つけられ回避」(3項目)であり、4因子(計12項目)で構成されていた。

表3は最終的に確定した項目のみを用いて1次調査のデータで探索的因子分析を行った結果である。

表3 「友人関係尺度」の探索的因子分析結果(1次調査)

	I	II	III	IV
悩み事を相談する	0.809	0.168	-0.016	0.068
自分の心をうち明けて話す	0.792	0.186	-0.016	-0.175
落ち込んだ時話を聞いてもらう	0.677	0.144	-0.041	0.049
おもしろい話をする	0.099	0.779	0.058	-0.102
ウケるようなことをする	0.250	0.732	-0.219	0.277
冗談を言って相手を笑わせる	0.308	0.696	0.257	-0.164
友達の内面に土足で踏み込まないようにする	-0.078	0.007	0.828	0.045
相手の気持ちに気をつかう	0.169	0.113	0.691	0.078
お互いのプライバシーに立入らない	-0.223	-0.026	0.505	0.170
友達からバカにされないように気をつける	-0.107	0.009	0.005	0.670
仲間の前で恥をかかないように気をつける	-0.010	0.012	0.094	0.593
友達から傷つけられないようにふるまう	0.171	-0.121	0.327	0.507

信頼性係数を確認した結果、いずれの因子においても高い信頼性係数が示された。1次調査では、「自己開示」( $\alpha = .817$ ,  $M = 4.13$ ,  $SD = 1.11$ )、「軽躁的關係」( $\alpha = .781$ ,  $M = 4.19$ ,  $SD = 0.98$ )、「侵入回避」( $\alpha = .701$ ,  $M = 4.13$ ,  $SD = 0.88$ )、「傷つけられ回避」( $\alpha = .617$ ,  $M = 2.99$ ,  $SD = 0.94$ )であった。2次調査においては、「自己開示」( $\alpha = .819$ ,  $M = 4.33$ ,  $SD = 1.05$ )、「軽躁的關係」( $\alpha = .863$ ,  $M = 4.27$ ,  $SD = 0.99$ )、「侵入回避」( $\alpha = .656$ ,  $M = 4.09$ ,  $SD = 0.83$ )、「傷つけられ回避」( $\alpha = .765$ ,  $M = 3.15$ ,  $SD = 1.00$ )であった。1次調査の「傷つけられ回避」と2次調査の「侵入回避」が他の変数に比べてやや低めではあるものの、.60を超えていることから項目の削除を行わずに、分析を行うことにした。

### 3.2. 交差遅れ効果モデル

構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling: 以下、SEM とする) を用いて、図1の交差遅れ効果モデルによる分析を行った。SNS利用の態度(3因子)が友人関係に対する態度(4因子)を決めるのか( $\beta_1$ )、あるいはその逆の因果の方向性として、友人関係に対する態度がSNS利用態度を決めるのか( $\beta_2$ )について検討する。前述したように高比良ら(2006)に従い、適合度指標に基づいて、誤差間分散に相関を0とする「モデル1」と誤差間分散に相関をつける「モデル2」のいずれを選択することにした。高比良ら(2006)と同様に、モデル1が採択されていたとしても、適合度指標が基準に至らない場合は、誤差間分散の相関を認めるモデル2を採択した。

分析の結果、全てのモデルにおいてCFIが.973~1.000、RMSEAが.00~.157である。CFIは.95以上で基準を満た

<sup>3</sup> 岡田(1999)では「自己閉鎖」といった負の側面が測定の対象となっていたが、本研究では因子負荷量の高い項目を取り上げることによって逆転項目に該当する項目のみが抽出されている。項目内容と因子名による混乱を招く可能性があることから、本研究では「自己開示」と命名して分析および考察を進めることにする。

しているときみなされるが、LINE 利用に関する 3 因子と傷つけられ回避の間で .10 を超える RMSEA が出力されたことから、誤差分散間の相関を許し、飽和モデルとなるモデル 2 を採択した。

図 3 は交差遅れ効果モデルであり、表 4 は分析の結果をまとめたものである。

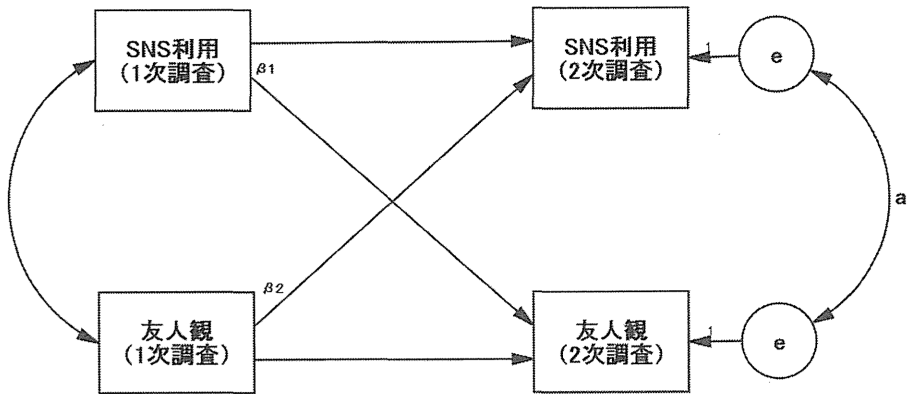


図 3 本分析に用いた交差遅れ効果モデル

表 4 SNS 利用態度と友人観の交差遅れ効果モデル (パス  $\beta_1$  | パス  $\beta_2$ )

	自己開示 $\beta_1$   $\beta_2$	軽躁的關係 $\beta_1$   $\beta_2$	浸入回避 $\beta_1$   $\beta_2$	傷つけられ回避 $\beta_1$   $\beta_2$
LINE 依存				
LINE 束縛感				.252**   .244*
LINE 利便性				
Twitter 依存				
Twitter 束縛感				
Twitter 利便性		.187*		

注：有意な効果がみられた場合の標準化係数 ( $\beta$ ) のみを示した (\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ )

分析の結果、「LINE 束縛感」と「傷つけられ回避」の間に双方向の因果関係が示めされた。具体的には、LINE 利用に束縛を強く感じる人ほど友人関係において傷つけられないように回避し ( $\beta = .252$ ,  $p < .05$ )、友人から傷つけられないように回避する人ほど LINE 利用に束縛を感じるようになった ( $\beta = .244$ ,  $p < .05$ )。

また、Twitter の利便性が「軽躁的關係」と関連していることが明らかになった。「軽躁的關係」は、友達と気楽に笑える関係でありたいといった考えに関連する項目で構成されており、Twitter が便利であると思う人は「軽躁的關係」を好んでいることが示された ( $\beta = .187$ ,  $p < .05$ )。

### 3.3. 同時効果モデル

同時効果モデルも交差遅れ効果モデルと同様に 2 次点目の誤差分散間の相関を 0 とする統制モデル (モデル 1) と統制をおかない非統制モデル (モデル 2) を設定し、適合度が良いモデルを採択した。その結果、CFI は .992 以上、RMSEA は .089 以下であることが明らかになり、誤差分散間の相関を許さないモデル 1 を採択することにした。

図 4 は同時効果モデルであり、表 5 は分析の結果をまとめたものである。

表 5 から SNS に対する束縛感に LINE と Twitter は異なる友人に対する態度が関連しており、かつその因果の方向性

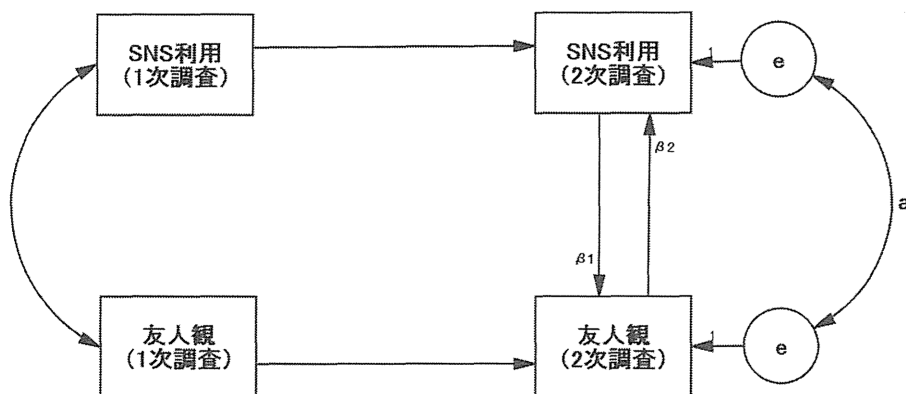


図4 本分析に用いた同時効果モデル

表5 SNS利用態度と友人観の同時効果モデル (パス  $\beta_1$  | パス  $\beta_2$ )

	自己開示 $\beta_1$   $\beta_2$	軽率的関係 $\beta_1$   $\beta_2$	没入回避 $\beta_1$   $\beta_2$	傷つけられ回避 $\beta_1$   $\beta_2$
LINE 依存				
LINE 束縛感	-.321**			.696*   .447*
LINE 利便性				
Twitter 依存				
Twitter 束縛感		-.235*		
Twitter 利便性				

注：有意な効果がみられた場合の標準化係数 ( $\beta$ ) のみを示した (\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ )

も異なることが読み取れる。LINEに束縛を感じる人は「自己開示」が低く、自分の話を人にしないことが示された ( $\beta = -.321$ ,  $p < .01$ )。LINEに対する束縛感と「傷つけられ回避」の双方向の因果関係が示されたが、本研究では、交差遅れ効果が示された「LINE束縛感」と「傷つけられ回避」の同時効果モデルの結果は解釈しないことにする。交差遅れ効果が認められた場合に、同時効果モデルにおける1時点の調査結果は2次調査における因果モデルを推定するための道具的な役割を果たすことができないからである(高比良, 2006)。

Twitterにおいては、交差遅れ効果モデルと同様に「軽率的関係」との関係性が示された。具体的には、気楽な友人関係を求める人はTwitterの使用に束縛を感じないことが示された ( $\beta = -.235$ ,  $p < .05$ )。

最後に、交差遅れ効果モデルと同時効果モデルにおいて、「没入回避」はSNSの利用とは関連性が見られなかった。また、「LINE依存」と「Twitter依存」はいずれの友人観とも関係性が示されなかった。

#### 4. 考察

本研究では、「SNS利用態度」と「友人観(友人に対する態度)」との因果関係の方向性について探求した。具体的には、2時点間にわたるパネル調査を実施し、交差遅れ効果モデルと同時効果モデルによる分析を行い、両者の関係性を探った。

様々なSNSが存在しているものの、質問紙の分量面での制約上、そして回答者の負担の制約があることから、本研究ではLINEとTwitterのみを取り上げた。実際にはFacebook、Instagram、LinkedIn、WhatsApp、TikTokなど、他の

SNSも同時に利用することが一般的である。本研究でのLINEとTwitterとの違いと同様に、これらのサービスごとにサービスの利用態度と友人観との関係性は異なっているであろうし、利用するSNSによって世代、性別、性格特性などが反映されている可能性が高い。また、同一のサービス内においても世代や性別、性格特性などによって異なる利用態度を示すことは十分にあり得ることから、本研究がSNSと友人観の一部のみを取り上げていることは否定できない。

一方で、LINEとTwitterは利用者数の多い代表的なSNSであり、その「利用態度」と「友人観」との因果関係の相違を明示的に示したことに本研究の意義があると言える。具体的には、(a) LINEとTwitterの「利用態度」と「友人観」がそれぞれ異なる因子と因果関係を有すること、(b) 「SNS利用」と「友人観」に関連性が示されない変数が存在すること、の2点である。ここからは交差遅れ効果モデルの分析結果と同時効果モデルの分析結果の両者を統合する形で、上記に関する考察を進めていきたい。

LINEとTwitterは異なる友人観との因果関係が示された。LINE利用における束縛感が「傷つけられ回避」と正の関係、「自己開示」と負の関係を示したことから、LINEの利用は消極的で、自己防衛的な友人関係と関連していることが読み取れる。一方で、Twitter利用は「軽躁的關係」と関連しており、利便性とは正の関係、束縛感とは負の関係が見られたことから、Twitterの利用は積極的、かつ気軽な友人関係の構築・維持と関わることが推察できる。このことは両者が異なる特性をもったSNSであるために、利用する目的、態度などが異なる可能性を示唆する。

LINEとTwitterの差異は、コミュニケーションの相手が特定できる程度と関連づけて解釈できる。LINEはTwitterに比べて、特定できる相手とのコミュニケーションが行われることが特徴的なSNSである。LINEでは1対1のやりとりだけではなく、グループチャット機能を利用して複数の人とのやりとりも可能ではあるが、いずれにせよ実際の付き合い、社会生活の延長での付き合いに基盤を置いたコミュニケーションが行われる。LINEにおけるやりとりは実際の人間関係や自分への評価に影響を与える可能性が含まれていることから、より慎重にコミュニケーションを行うことが予想できる。冒頭でも述べたように、近年の若い世代は人間関係が希薄化し、友人とは「優しい関係」を重視する傾向から、実生活と直接的に関連するLINEの利用に束縛を感じる可能性が考えられる。

一方で、Twitterは読者の中に知らない人も含まれることがあり、不特定多数との関係性が想定されるSNSである。Twitter利用が便利だと思う人は「軽躁的關係」を求めることが交差遅れ効果モデルから確認され、さらに「軽躁的關係」を好む人はTwitter利用に束縛感を持たないことが同時効果モデルから明らかになった。これらの結果から、Twitterが便利だと思う人は知らない人とのネット上での付き合いに積極的に参加し、Twitterの利用に息苦しさも感じないといった因果関係の連鎖が読み取れるだろう。

Twitterの利用と「軽躁的關係」も「優しい関係」と関連づけることができる。Twitterでは日常について語るものの、自分の生活を共有することには限界がある。現実世界における損得に影響を与えないネット上での付き合いにおいては、見せたい自分を操作することができ、かつより気軽な関係が構築できるだろう。結果的に自己を脅かさずに、一定の距離を維持することのできる「優しい関係」が維持しやすい環境であるとも言える。

最後に、本研究では「SNS依存」因子はいずれの「友人観」とも因果関係が示されていなかった。また、友人のプライバシーを守ろうとする「浸入回避」はいずれの「SNS利用態度」とも因果関係が示されていなかった。因果関係が示されなかった理由に対する回答を本研究の結果から明言することは難しいため、積極的な解釈を行うことは控えた。ただし、SNSの利用に対する否定的な評価の多くを占めている「SNS依存」が、人間関係に影響を与えていなかったことを指摘しておくことには意義があるだろう。

#### 引用文献：

- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄(2003). 携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係 教育学科研究年報, 29, 7-14.
- 赤坂瑠以・坂元 章(2008). 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響——パネル調査による因果関係の推定—— パー

- ソナリティ研究, 16(3), 363-377.
- 土井 隆 (2008). 友だち地獄 筑摩書房
- Finkel, S.E. (1995). *Causal analysis with panel data*. Thousand, Oaks: Sage.
- 藤 桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響——ウェブログ・オンラインゲームの検討より—— 社会心理学研究, 25(2), 121-132.
- 五十嵐 祐・吉田俊和 (2003). 大学新生の携帯メール利用が入学後の独立感に与える影響 心理学研究, 74(4), 379-385.
- 石川勝博 (2008). 大学生のケータイ・メールによるコミュニケーションにおける親密度と自己の開示に関する調査研究 国際基督教大学学報教育研究, 50, 11-20.
- 磯 友輝子 (2011). 実験法 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (2011). コミュニケーション研究法 (pp. 66-79) ナカニシヤ出版
- 春日章宏・三枝優一・古井陽之助・速水治夫 (2007). SNS でのチャットによる友達の輪拡大支援システムの提案 情報処理学会研究報告, 32, 61-66.
- Kline, R. B. (2004). *Principles and practice of structural equation modeling. (2nd ed.)* New York : Guilford Press.
- 江下雅之 (2007). SNS における日記コミュニケーションの研究——交流の契機としての日記—— 目白大学文学・言語学研究, 3, 57-70.
- 小寺敦之 (2009). 若者のコミュニケーション空間の展開——SNS「mixi」の利用と満足、および携帯メール利用との関連性—— 情報通信学会誌, 27(2), 55-66.
- 松尾 豊・安田 雪 (2007). SNS における関係形成原理——mixi のデータ分析—— 人工知能学会論文誌, 22, 531-541.
- 中村 功 (2003). 携帯メールと孤独 松山大学論集, 14(5), 85-99.
- 中澤 渉・三輪 哲 (2012). 社会学におけるパネルデータ分析の展開 理論と方法, 27, 19-22.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理研究, 47, 432-439.
- 尾上恵子 (2007). 女子学生の間関係構築における諸要因について 一宮女子短期大学紀要, 46, 15-22.
- 岡本 香・江川朋幸 (2003). 携帯電話、携帯メールのコミュニケーション観と現代青年の友人関係態度との関連 日本教育工学雑誌, 27, 137-140.
- 大沼美由紀・木村 敦・佐々木寛紀・武川直樹 (2012). エージェントの存在が SNS の否定的な発信抑制に及ぼす効果の検討 通信技報, 113(72), 19-24.
- 大向一輝 (2006). SNS の歴史 電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン, 9(2), 70-75.
- 小塩真司 (2007). 実践形式で学ぶ SPSS と AMOS による心理・調査データ解析 東京図書
- 総務省 (2019a). 電気通信サービスの契約数及びシェアに関する四半期データの公表——平成 30 年度第 3 四半期 (12 月末) —— Retrieved from [http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000610682.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000610682.pdf) (September 1, 2019.)
- 総務省 (2019b). 平成 30 年版情報通信百書のポイント Retrieved from <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd252110.html> (September 1, 2019.)
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂元 章 (2006). 縦断調査による因果関係の推定——インターネット使用と攻撃性の関係—— パーソナリティ研究, 15, 87-102.
- 武市久美 (2014). 子育てにおける SNS 利用について——「ママ友」コミュニケーション力に着目して—— 東海学園大学研究紀要, 19, 79-89.
- 田山 淳 (2011). 高校生の携帯電話依存と心理・行動要因との関連について 心身医学, 51(3), 245-253.

- 戸ヶ里泰典 (2009). ストレス対処能力概念 Sense of Coherence の抑うつ傾向ならびに心理社会的な職場環境との因果関係の検証——構造方程式モデリングを用いた検討—— 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト Retrieved from [https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP\\_024Togari.pdf](https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP_024Togari.pdf) (2016年4月15日)
- 辻 大介 (2006). つなかりの不安と携帯メール 関西大学社会学部紀要, 37(2), 43-52.
- 兎本由香里・日下部典子 (2011). 携帯電話とパソコンの利用実態——ソーシャルサポートとの関連性の検討—— 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 91-100.